

愛媛の道標石から見た四国遍路

今村 賢司（愛媛県歴史文化博物館専門学芸員）

The Shikoku henro as seen from stone path markers in Ehime prefecture

Kenji IMAMURA

Specialized Curator, Museum of History and Culture of Ehime Prefecture

In this paper I have examined the stone path markers (shirube-ishi) along the Shikoku pilgrimage route in Ehime prefecture erected between the Edo period (1603-1868) and Showa period (1926-1989) before World War II. Specifically, I looked at 1) the significance of the markers as an item for researching the Shikoku henro, 2) the specific characteristics of these markers as research material, 3) the historical transition of these markers in Ehime, 4) aspects of the Shikoku henro during the early part of the Edo period as seen from the oldest existing part markers in Matsuyama city with an inscription, Hōbōhyōseki and 5) the naming of the route and how the stone markers indicated the route. Through this examination of trends during each era of the Shikoku henro as seen through the historical changes of the number of stone path markers in Ehime prefecture, Hōbōhyōseki, and *fudabasami* (wooden boxes that hold votive papers) collected at Temple 52, Taisanji, it became clear that people participated along a seven-temple pilgrimage around Matsuyama in Ehime prefecture and the Shikoku henro during the early Edo period before the Shikoku pilgrimage became popular among the common people due to the publication of Shinnen's guidebook, "Shikoku Henro Michishirube". From analyzing the way the pilgrim route is shown on each stone path marker the following points were clarified: markers along the Shikoku henro route were made easy to understand for people on the pilgrimage; were made visually, intuitively, in three-dimensions and in a tactile manner; path markers along the Shikoku henro developed a unique style with a hand pointing the way and a statue of Kōbō Daishi; and markers with "*henromichi*" - the name of the pilgrimage route - became a fixed item in Shikoku. For a long time, these stone path markers - a sort of an unspoken gift - have acted a form of support to people who have traveled along the Shikoku henro. They are an important item that remains today showing where the path was and allowing us to create an accurate picture of the Shikoku henro based on each era and region.

はじめに

「山を踏みてうれしきものは道しるべ」。中務茂兵衛が建立した遍路道標に刻まれたこの歌は、遍路道における道標石の役割についてわかりやすく示している⁽¹⁾。筆者の経験からも実際に遍路道を歩くと、とりわけ道に迷い易く不安を感じる山道において遍路道標に出会うと、この道が間違っていなかったことを確認して安堵し、四国遍路が弘法大師信仰を中心とした先人の多くの人々によって激励・守護されているように感じることがある。道標には安全に通過してほしいという設置者（願主、施主、世話人等）の想いや、先祖供養、村中安全などの祈りや願いが込められている。遍路道にたたずむ路傍の標石は長年、風雪に耐えながら、日々行き交うお遍路に進むべき方向を導いている。物を言わない遍路道標は「最前線の遍路道における無言の常設のお接待」であり、「無言のお接待による常設案内者」といえる。遍路道標石は四国遍路を支えてきた人々の功德石、善根石ともいえよう。

本稿は、筆者が愛媛の遍路道を实地踏査して確認した道標石の中で、おもに江戸時代から昭和初期（戦前）の遍路道標石に着目し、1 四国遍路研究資料としての遍路道標石の意義、2 遍路道標石の資料的特性、3 愛媛の遍路道標石の歴史的推移、4 松山市にある現存最古の紀年銘遍路道標石「法房標石」から見た江戸時代前期の四国遍路の様相、5 遍路道標石における案内指示の方法及び遍路道の名称について検討するものである。愛媛の遍路道標石に刻まれた様々な情報から四国遍路の実態を考えてみたい。

1 四国遍路研究資料としての遍路道標石

遍路道標石の研究はこれまで愛媛大学の地理学者村上節太郎、喜代吉榮徳、梅村武、小松勝記をはじめとする諸氏によって大きな成果が発表され、自治体による悉皆調査報告書も作られている⁽²⁾。筆者は、遍路道標について①四国遍路（主として四国八十八箇所と弘法大師の聖跡巡礼）の道筋に立てられた道案内の標示物、②巡礼者（お遍路等）に次の目的地（札所等）までの距離や方向指示のために設けられたもの。③遍路道における無言の常接待、④四国遍路を支えてきた人々の功德石、善根石、⑤四国霊場の札所と札所を結ぶ遍路道を構成する重要な要素（遍路道の証拠）、と捉えている。特に⑤については廃道化した旧遍路道の場所やルートを確認する上で遍路道標石の存在が大きな手掛かりとなる⁽³⁾。

遍路道標石には、①札所情報（寺社名、札所番号、本尊、縁起、奥院など）、②交通情報（方向、方位、道名《遍路道、逆遍路道、〇〇道、新道》、地名、距離、交通手段など）、③信仰情報（大師像、仏像、梵字、御宝号、真言、願目《先祖・親族供養、家内安全、村中安全、海上安全他》など）、④設置関係者情報（願主、施主、世話人、石工の氏名、住所、建立年月など）、⑤その他（宣伝広告、詩歌、巡拝度数など）、などの四国遍路に関する多彩な情報が記されている。遍路道標石は現地（へんろ道等）に残された時代別・地域別の四国遍路の実像をこんにちに伝えるもので、四国遍路の歴史を探究するための研究資料として有効である。

2 遍路道標石の資料的特性

遍路道標石の資料的特性として、①移動性、②情報の更新性、③受難性、の点があげられる（【図1】）。

①設置後の道路拡張や開発等で道標石は移動し、案内標示内容と方向が一致しない事例は数多く、当初の設置場所を特定することは難しい。移転された複数の道標石が一箇所に寄せ集められたり、近隣の寺院や個人宅等で保管されたり、行き場を失った道標石は博物館・資料館等で保管・展示⁽⁴⁾されているものもある。

②真念道標や武田徳右衛門などの江戸時代の古い遍路道標石に見られる現象として、標石の移動や時代の進展にともない道標石が後世に改刻・添刻され新情報が加えられ、道標石の内容が更新される事例が確認される⁽⁵⁾。

③遍路道標石は野外にある金石文のため酸性雨や風化などの自然要因により経年的な劣化が進行し、標石表面の剥離、欠損が危惧され、刻字の判読が難しくなっている。また、機能を失った標石は、折られて放置されているものも見られる。車道併用の遍路道の場合、自動車による衝突事故により道標石そのものが一瞬にして消滅する恐れがある。実際、交通事故で破損した遍路道標石が金属等の補強材を用いて現地で復元設置された痛々しい姿の遍路道標石や、補修不可能で新たに復元した遍路道標も見かける。他に、塗料等で標石の表面が汚されたもの、地中に深く埋没したもの、所在が行方不明となっているものもあり、人的被害を受けている遍路道標石も見られる。

さらに問題視すべきは、遍路道標石に対する人々の無記憶・無関心が懸念される。時代の移り変わりにともない、地域に存在する道標石についての人々の記憶は次第に失われ、やがて遍路道標の存在自体も忘れられてしまうことが憂慮される。遍路道を歩くと時折、道標石の設置場所がゴミの集積場となっている光景を見かける。遍路道標石への無関心から生じる現象とも考えられる。一方、今治市古谷の真念道標石は源五郎地川の橋げたに使用されていたが昭和58年に河川工事の際に地元住民が発見し、喜代吉榮徳氏によって見出されて再建されたという奇跡的な好事例もある⁽⁶⁾。遍路道標石は四国遍路の歴史文化を解明するための研究素材として有効であるが、その取扱いにあたっては以上述べてきた遍路道標石の資料的特性に留意しなければならない。

3 愛媛の遍路道標石の歴史的推移

四国八十八ヶ所霊場の中での愛媛の札所数（第40番～第65番の26ヶ寺）は四国第1位、距離は高知に次ぐ四国第2位である。札所の数が多く、遍路道が長いという愛媛県域の四国遍路の環境からは、遍路道標の設置数も多く、その内容も時代別や地域別で様々なものと推察される。

愛媛県生涯学習センター『伊予の遍路道』によると、2001年12月現在、確認できた愛媛の遍路道標石は619基で、そのうち建立年代が判明できたものは295基（約47.65%）とある⁽⁷⁾。当時、確認できた遍路道標石の中にはすでに風化、劣化、欠損、地中に埋没等で刻字が判読できないものが多かったことと、同書に紹

介されている道標石が現在行方不明となっているものや、同書に報告されていないもの、愛南町域で真念道標石が新発見された事例などがあるように、遍路道標数の実数は絶えず増減しているが全体数が増加することは考えにくい。そのため、ここでは基本的に『伊予の遍路道』の所見をもとに愛媛の遍路道標石の大きな歴史的推移の傾向を捉えてみたい。

まず、愛媛の紀年銘遍路道標石を時代別にみると、江戸時代 116 基（約 39.3%）、明治 121 基（約 41.0%）、大正 38 基（約 12.8%）、昭和（昭和 20 年以前）20 基（約 6.7%）となる。江戸時代のうち、貞享～元禄年間建立とされる真念、寛政～文化年間建立とされる武田徳右衛門標石は含まれていないため、それらを入れると実際には江戸時代の遍路道標石はさらに多く、比率も高くなる。

『伊予の遍路道』から江戸時代の紀年銘遍路道標石を時期別・年号別の数を抽出すると、前期は 4 基（貞享 1 基、元禄 3 基）、中期は 24 基（享保 1 基、元文 4 基、寛保 1 基、宝暦 1 基、安永 3 基、天明 6 基、寛政 8 基）、後期は 88 基（享和 1 基、文化 8 基、文政 11 基、天保 13 基、弘化 9 基、嘉永 26 基、安政 6 基、万延 1 基、文久 6 基、元治 1 基、慶応 6 基）となる。

現存確認できる愛媛の紀年銘遍路道標石で最古のものは貞享年間のものが 1 基（法房標石）あり、続いて元禄年間のものが 3 基ある。貞享～元禄年間頃に建立されたと考えられる無紀年銘の真念標石が愛媛には 8 基ほど確認され⁽⁸⁾、それらをあわせても 12 基で、江戸時代前期の遍路道標石は県内にわずかである。概して、時代が下るにつれて古い道標石は経年の劣化や保存環境の問題から現存数が減少していく傾向にあるため、江戸時代前期の遍路道標石数は現存数以上に存在していたものと推測する。

愛媛の紀年銘遍路道標石は、江戸時代前期から中期そして後期にかけて現存道標数が増加している。幕末期に遍路道標が多く建立されていることが見てとれる。このことは単純に江戸時代に庶民に四国遍路が広がり、遍路人口の増加にともない遍路道標石の数が増加していくと捉えることはできないが、江戸時代を通じて四国遍路の道標石が愛媛の街道、脇道、山道などに数多く造られ、それにより遍路道のルートが現地で直接遍路に指示され、それは時代の交通環境等により多少のルート変更はあったとしても、遍路道標石によって基本的に「伊予の遍路道」（歩き遍路道）が規定されたことを示している。

遍路道標石のうち江戸時代のもの（約 39%）、明治時代のもの（約 41%）で江戸～明治時代の道標石をあわせると 237 基（約 80%）となり、愛媛の紀年銘遍路道標石の大半を占めていることがわかる。明治時代においても江戸時代と同等数の遍路道標石がつくられている。つまり愛媛では江戸時代を通じて遅くとも貞享年間にはすでに遍路道標石が設置され、10 基以上の紀年銘遍路道標石が確認できる文政、天保、嘉永期を道標石設置のピーク期と見なし、幕末にかけて伊予国内の遍路道で道標石が整備されていく過程が見てとれる。明治時代に入ると、四国霊場の神仏分離や新道開通などの交通環境の近代化にともない、中務茂兵衛らの尽力によって新しい遍路道標石が整備された過程があり、大きく 2 つの過程があったことを示していると考えられる。一方、大正時代から昭和初期（戦前）にかけて、紀年銘遍路道標石は 58 基（約 20%）で少ない。大正時代にも中務茂兵衛らによる道標石設置活動は行われているが、明治時代にすでに大半の遍路道標石が整備され、新規に道標設置の必要性が弱まったことや、道標石設置の中心人物であった茂兵衛が大正 11 年に亡くなっていることなどに起因すると考えられる。昭和（戦前）の遍路道標が少ないのは戦争による影響であろう。

4 法房標石から見た江戸時代前期の四国遍路の様相

四国霊場第 47 番八坂寺から 48 番西林寺へ向かう遍路道（西林寺道）沿いの松山市恵原町の土用部池堤防下に、貞享 2（1685）年 3 月の紀年銘を有した道標石（小稿では「法房標石」と記す）があり、愛媛県内現存最古の遍路道標石として注目されている。それには自然石（地上部分高さ 110 cm、幅 38～54 cm、奥行 12～26 cm）の表面に「（手印）右遍ん路道／貞享二乙丑 三月吉日 法房」と刻まれている（【図 2】）。

法房標石は四国中にこの 1 基しか現存確認されていない。設置関係者と考えられる「法房」についても不明で謎が多い。法房標石に記す手印、方位（右）、年号、設置者などの刻字の情報が貞享 2 年当初のものか、あるいは後世に部分的に追刻されたものか明確な根拠を示すことはできないが、字の配置、線刻による石彫り技法の統一感など標石の全体から見た場合、際立った不自然さは認められない⁽⁹⁾。よって筆者は貞享 2 年設置当初からの形状や内容を今に伝えている遍路道標石として論を進める。

真念が貞享～元禄年間頃に建てた真念標石が小型の加工石によるものに対して、法房標石は自然石で形状も大きく目立つ存在である。高知室戸の金剛頂寺道沿いにある、法房標石のわずか1ヶ月前にあたる貞享2年2月の紀年銘を有した現存最古の女人結界石も同様に大きな自然石で作られ、ともに真念標石とは異なる貞享年間の遍路道標石として注目される。

法房標石のもつ大きな特徴は、①紀年銘遍路道標石では現存最古級に属するもので、高知室戸の金剛頂寺道沿いにある貞享2年2月の紀年銘を有した女人結界石に次ぐ2番目の古さ、②現段階で「へんろ道」と記された四国最古の標石である、③真念『四国邊路（徧禮）道指南』（貞享4年刊）以前の遍路道標石、という点にある。

この法房標石が存在する意味を考えると、真念『四国邊路（徧禮）道指南』以前に、八坂寺付近の遍路道沿いに「へんろ道」という他の道と区別された巡礼者（主に遍路）を対象とした道があったこと、その背景には遍路の往来者数がある程度あったことなどが予測される。また、この境界のへんろ道が迷い易く、標石による道案内を必要としたこと、へんろ道以外への遍路の立ち入りを回避して、指定する遍路道を無事に安全に通過させようとする道標石設置者の何らかの意図があったと推察する。

法房標石は貞享年間、真念道標石以外にも各地に遍路道標石が建てられていたことを想起させ、案内記『四国邊路道指南』の出版によって四国遍路が次第に庶民に広がっていく以前の江戸時代前期に遍路道標石が建てられるほどの一定数の巡礼者がいたこと示唆する。この点について注目すべき資料に、松山市にある四国霊場第52番札所太山寺に伝わる真念以前の札挟み（承応年間と明暦3年銘の2点）がある。

承応年間（1652-54）の札挟みには墨書で「奉納七ヶ所辺路同行五人 承応□年二月吉日」「梵字（ユ）南無大師遍照金剛」とあり、明暦3年（1657）のものには「奉納七ヶ所遍路同行二人 明暦三年丁酉二月吉祥日」とある（【図3】）。その墨書内容と札所の地理的観点から、いずれも松山地方の七ヶ所の霊場を順拝する七ヶ所辺路（遍路）に使用された札挟みであることがわかる⁽¹⁰⁾。近代の松山近郊における七ヶ寺詣りには、52番太山寺～46番浄瑠璃寺が相当し太山寺も八坂寺も含まれており、江戸時代においても同様であったと考えられる。すなわち、太山寺に伝わるこの札挟みは、真念の『四国邊路道指南』が刊行される貞享以前に松山地方に小規模な巡礼（小辺路）が行われ、一定数の順礼者がいたことを示している。七ヶ所の一つであった八坂寺や西林寺道にも多くの巡礼者が往来したと考えられ、法房標石はこうした背景の中で作られた可能性がある。法房標石や太山寺の札挟みは、真念以前の江戸時代前期における松山地方の七ヶ所辺路や四国遍路の様相を示すものとして重要な遍路資料といえる⁽¹¹⁾。

5 愛媛の遍路道標石に見る案内指示の方法について

遍路道標石である以上、往来の遍路に対してどのようにして進むべく道を案内したのか、愛媛の個々の遍路道標石の観察を通じて、案内指示の方法について検討する。

まず、標石の形状については自然石型（【図4・5】）、地蔵型（光背型、台座型）（【図6】）、角柱型（頭頂部角錐型）（【図7】）・蒲鉾型（【図8】）・笠型（【図9左】）・屋根型（【図9右】）・平坦型）、円柱型（【図10】）、常夜灯型（【図11】）などが確認される。円形石材の神社の鳥居の再利用と考えられている。

標石に刻まれた情報には文字と絵画に大別される。文字情報では、進むべく方向（左・右、此方、すぐ、上・下、逆など）、道の名前、札所の名称、次の目的地までの距離などが記されている。方向の表記では全体として左・右の指示が多く見られる。江戸時代前期の真念道標石（【図7左】）も「左・右」表記が多く、江戸時代は丁字路の分岐点などに遍路道標石が建てられていたことを意味している。文化・文政年間のものには「此方」と表記されている（【図8】）。直進を意味する「すぐ」、山道の上り下りの地形を利用した「上・下」（【図12】）の方向指示、札所を反時計回りに進む「逆」（【図10右】）の方向指示などが確認できる。なお、愛媛の遍路道標石では「東・西・南・北」の方角指示は確認できなかった。

道の名前では、「佐禮山道」「国分寺道」「前神寺道」「香園寺道」「吉祥寺道」「いわや道」などのように次の札所の名前を冠した道名も確認できるが、全体として漢字、変体仮名、平仮名など表記の違いはあるが、「へんろみち」とするものが257基で約42%を占めて多いことがわかる。あくまで愛媛の遍路道標石の事例ではあるが、江戸時代以来、四国遍路の巡礼道は「へんろみち」として広く人々に浸透していたことがいえそうである。特異な事例として、方言と思われる「へんろう道」、「へんど道」⁽¹²⁾などの表記も確認できる（【図

13】)。また、良質な花崗岩に美しい流麗な文字を深彫りした芸術的な遍路道標も見られる（【図14】）。

案内指示の方法で特徴的なのは、江戸時代の大半の遍路道標石では、文字情報に加えて、標石の上部など目立つ箇所に絵画的表現による手印（手形、手のひら、人差指、袖口付など）があり、進む方向を視覚的にわかりやすく示していることである。手印の中には素朴な線刻によるものから、浮彫りで立体的に表現され、手の爪や皺など細部まで表現されたものもあり千差万別の趣がある。たとえ文字が判読できなくとも手印を見れば、あるいは触れば道に迷うことはない。今治地方の遍路道沿いにある手形石は文字情報が一切なくまさに手印のみのシンプルな遍路道標石もある（【図5】）。こうして見ると、遍路道標石にとって手印そのものは図案化・装飾化された遍路道の方向マークとして人々に容易に認識されたと考えられる。遍路道標石に手印が多いのは四国遍路が88ヶ所の札所や奥院、番外霊場など巡礼者が訪れる聖地の数が非常に多く、さらに遍路道の距離も長く、分岐が多い複雑な遍路道を視覚的にわかりやすくする工夫ともいえる。また、手印でわかりやすく本尊の場所を示す事例も確認できる（【図11右】）。41番龍光寺境内にある江戸時代の常夜灯には明治12年に追刻されたと考えられる文字「札所ほんぞん」と大きな手印がある。これは明治期の神仏分離により札所が稲荷社から龍光寺となり、巡拝する場所が旧境内上段に位置する稲荷社から下段の本堂（本尊十一面観音）に変更したことで、参詣の混乱を防ぐための処置と考えられる。

もう一つ遍路道標石にとって手印とともに重要なものに、偶像（弘法大師、仏像）、梵字、真言、宝号などに示される弘法大師信仰を表現することである。真念道標石に刻まれている宝号「南無大師遍照金剛」、武田徳右衛門標石の弘法大師像などはその代表例である。つまり単なる道案内の標石ではなく、標石そのものが信仰の対象となるように作られている。特に弘法大師像をもつ道標石は道案内の機能を失っても、大師像がある限り石仏として各地で祠などに安置され祀られている。愛媛の紀年銘遍路道標のうち、仏像や弘法大師像が刻まれたものは104基で全体の約17%に相当するが、これには年号がほとんど記されていない武田徳右衛門標石が含まれていない。弘法大師の遍路道標石は実際には数が多い。

こうして見てくると四国遍路の遍路道標石は、あらゆる階層の遍路に対して、道標としてのわかりやすさを求め、視覚的、直感的、立体的、触感的に作られていると考えられる。形状は小型から大型化し、文字情報のみならず手印による方向マーク、さらに弘法大師像をあわせもった遍路道標石（【図8右、9左、14右】）はその象徴であり、江戸時代後期には四国遍路道標石の一つの様式が成立している。こうした背景には、遍路人口の増加、設置関係者の資金力、石工の石材加工技術の向上などが考えられる。

また、方向指示とともに遍路に対して伝えた情報に交通手段や道中のおすすめ情報などがある。道路開通にともなう「新道」や「近道」による表記、航路による海を渡る遍路道（土佐～南予地方の沿岸航路、松山から宮島参詣）の案内も確認できる。特に宮島参詣は、宝暦13年（1763）の細田周英「四国徧禮絵図 全」にも「是ヨリアキノミヤシマエ 舟路十八里」と紹介され、江戸時代から四国遍路の途中で行われている。実際、松山の和気、堀江界隈の遍路道には明治16・19年の宮島航路案内を記した遍路道標石がある（【図15】）。昭和以降は、鉄道の延伸や国鉄バスの運行によって新しい遍路道のルートが生まれ、そうした動きに対応した遍路道標石も作られている（【図16】）。遍路道には道中の「お接待所」までの距離を示した地蔵丁石や、「打戻り」のルート案内を指示したもの（【図17】）、仏絵などのお土産を取り揃える店舗の宣伝広告、仙龍寺の厄除け弘法大師像のご開帳の案内（【図18】）などもあり、歩き遍路の道中における実用的な情報が遍路道標石に記されている。このように遍路道標石の内容からは各時代の各地域における四国遍路の実態をうかがい知ることができる。

おわりに

以上、本稿は最初に四国遍路の研究資料としての意義や有効性、その資料的特性について述べた。そのうえで、筆者が愛媛の遍路道を实地踏査して確認した江戸時代から昭和時代（戦前）の遍路道標石をもとに、そこに刻まれた様々な具体的な情報から各地域における四国遍路の実態を考察してきた。

愛媛の遍路道標石数の歴史的推移から見た四国遍路の時代別の動向や、道標石によって遍路道のルートが規定されること、松山市の西林寺道沿いにある貞享2年銘の現存最古の紀年銘遍路道標石「法房標石」と、四国霊場第52番太山寺に伝来する承応年間と明暦3年の札挟みからは、真念の『四国邊路道指南』によって四国遍路が庶民に広がっていく以前の段階で、道標石や巡礼用具が作られるほど巡礼（七ヶ所辺路を含め

た四国遍路)が松山地方で活発に行われていたであろうことが指摘できる。さらに、個々の遍路道標石における具体的な案内指示の方法や、四国遍路の遍路道標石は遍路に対して、道標としてのわかりやすさを求め、視覚的、直感的、立体的、触感的に作られていること、様々な手印や弘法大師像をもつ四国遍路特有の道標石のスタイルが成立し、「へんろみち」という四国遍路の巡礼の道の名称が定着し人々に浸透していたことを明らかにした。

中務茂兵衛の添句歌標石に「うまれ来て残るものとて石ばかり我が身は消えし昔なりけり」⁽¹³⁾とある。こんにち現存する遍路道標石は遍路道のルートや痕跡を示し、各時代、各地域における四国遍路の具体的な情報が読みとれ、地域や遍路道ごとの四国遍路の多様な実像が見えてくる。遍路道標石は長年遍路道で行き交う遍路に対して「道案内という無言のお接待」をつとめて四国遍路を支えてきた。すなわち遍路道標石は現地に残る四国遍路の痕跡を示すかけがえのないオンリーワンの資料であり、時代別、地域別のリアルな四国遍路像を提供してくれる。今後、歴史的価値が高い遍路道標石は文化財指定などの保護措置を講じて、遍路道標石から見た四国遍路の研究視点をさらに深めて活発化していくことが求められる。

今後の課題は本稿の知見をもとに、四国全体の遍路道標石から再検討すること、他の巡礼(金毘羅、高野山詣、地四国、西国巡礼等)の遍路道標石の事例とあわせて比較検討する必要がある。

註

- (1) 明治35年建立、西予市宇和町鬼窪一区。同様な内容をもつ中務茂兵衛標石は他にも確認されている。
- (2) 遍路道標石に関する研究で主として愛媛に関するものを年代順にあげる。村上節太郎「四国遍路の道標」1983年。喜代吉榮徳「四国遍路道しるべ付・茂兵衛日記」1984年。喜代吉榮徳『中務茂兵衛と真念法師のへんろ標石並に金倉寺中司文書』海王舎、1985年。喜代吉榮徳『四国の辺路石と道守り』海王舎、1991年。今治市教育委員会『今治の道しるべと句碑』1992年。愛媛県教育委員会文化財保護課『愛媛県歴史の道調査報告書』1995年～。松山市教育委員会『松山の道しるべ』1999年。愛媛県生涯学習センター『伊予の遍路道』2002年。喜代吉榮徳「へんろ石セレクト21～東予篇～」『四国辺路研究』第23号、海王舎、2005年。喜代吉榮徳「武田徳衛門丁石の研究」(『善通寺教学振興会紀要第15号』2010年)。梅村武『四国遍路シリーズ へんろ道』2012年。小松勝記『遍禮標石 徳右衛門標石特集』安楽寺、2015年。本稿の内容もこうした先学の学恩によるところが大きい。
- (3) 一例をあげると、西条市小松町大郷馬返にある武田徳右衛門の横峰五十丁石。「(梵字)(大師像)是より横峯迄五十丁／越智郡朝倉下村 施主 孫惣／願主 徳右衛門」と刻まれている。現在、この遍路道は廃道化しており、発見するのに苦労した遍路道標石である。
- (4) 現在、愛媛県歴史文化博物館の常設展示室「四国遍路」に展示する中務茂兵衛の遍路道標石は、当初は道後上市橋のたもとにあったが、済美高等女学校、愛媛県立美術館南館内庭を経て、愛媛県立歴史民俗資料館に保管され(註(2)『伊予の遍路道』197頁)、平成16年度、歴史民俗資料館閉館にともない歴史文化博物館に移管された。
- (5) 真念道標石では今治市国分6丁目の標石が「左」を「右」に改刻(図7)され、もと宝寿寺境内にあった標石が「左」を手印に改刻(図1)。武田徳右衛門道標石では今治市菊間町佐方の標石に中務茂兵衛が添刻(註(2)『伊予の遍路道』202頁)など。
- (6) 註(2)『伊予の遍路道』134頁。図7左参照。
- (7) 註(2)『伊予の遍路道』224頁。
- (8) 今村賢司「愛媛の遍路道標考」『四国へんろの旅 絵図・案内記と道標』愛媛県歴史文化博物館、2012年。
- (9) 喜代吉氏は、法房標石の「右」の字が小さく当初からのものか不明で、手印は後人の添刻と考え、刻手行者の「川のや政吉」の手による可能性があるとは指摘されている。註(2)喜代吉榮徳『四国の辺路石と道守り』17頁。
- (10) 今村賢司「四国霊場第五十二番太山寺伝来の版木と札挟み・納め札について」胡光編『四国霊場第五十二番札所太山寺総合調査報告書(1)』愛媛大学法文学部日本史研究室 2015年。
- (11) 今村賢司「近世前期における伊予国松山地方の四国へんろの様相―真念『四国邊路道指南』以前の遍路道標と札挟みを素材として―」『愛媛県歴史文化博物館研究紀要第20号』、2015年。
- (12) 註(2)喜代吉榮徳「へんろ石セレクト21～東予篇～」26頁。喜代吉氏はこの標石を明治時代の建立と見なし、「へんど」という言葉が一般に差別語とされているが、「おへんどさん」という表現からも差別と区別の境界が不明で複雑な幅広い意味合いを内包していると指摘されている。
- (13) 註(4)の中務茂兵衛標石の背面に刻まれている。同様な内容をもつ中務茂兵衛標石は他にも確認されている。

【付記】本報告及び本稿作成において遍路道標石の拓本画像の利用について喜代吉榮徳氏からご協力いただきました。末筆ながら感謝申し上げます。

【図1】遍路道標石の資料的特性



【図2】愛媛県内現存最古の紀年銘遍路道標・法房標石
貞享2(1685)年3月 ※真念『四国遍路道指南』(貞享4年刊)以前の標石



【図3】52番太山寺に伝わる真念以前の札挟み



【図4】愛媛の遍路道標石(自然石型)
道名「へんろ道」



【図5】愛媛の遍路道標石(自然石型) 手形石



【図6】愛媛の遍路道標石(光背型、台座型)

「弘法大師の道標」



「地藏道標」



【図7】愛媛の遍路道標石(角柱型・頭頂部角錐型)
左・右による方向指示、道名「へんろみち」



【図8】愛媛の遍路道標石(角柱型・頭頂部蒲鉾型)
「此方」による方向指示



【図9】愛媛の遍路道標石(角柱型・頭頂部笠型、屋根型)



【図10】愛媛の遍路道標石(円柱型)



【図11】愛媛の遍路道標石(常夜灯型)



【図12】「上・下」、「すぐ」による方向指示



【図13】「へんろう道」と「へんど道」



【図14】深彫り・大文字・大手形



【図15】宮島航路案内の遍路道標石



【図16】鉄道・バス案内の遍路道標石



【図17】常接待、打戻り案内の遍路道標石



【図18】中務茂兵衛の遍路道標石に見る宣伝広告

